

●モノグラフ
小学生ナウ
Vol. 10-3

校外学習

目次

要約	2
はじめに	6
1. 調査サンプル校のプロフィール	7
●調査対象校の概要	7
●属性間の関連	10
2. 学校としての対応	12
●校外学習の実施状況	12
●校外学習の実施に向けて	15
3. 5年生の校外学習	18
●諸条件	18
●プログラム	22
●子どもの活動と評価	24
●今後の方向	27
4. 6年生の校外学習	30
●諸条件	30
●プログラム	34
●子どもの活動と評価	37
●今後の方向	39
5. 地方別に見た校外学習の特色	42
●地方別の比較を通して	42
●地方別に見たプログラムの特徴	50
6. 校外学習の実施をめぐって	53
●学校規模と校外学習	53
●地域性と校外学習	58
7. 豊かなプログラムの実現のために	60
●「校外学習のしおり」の特徴	60
●プログラムの編成をめぐって	69
地球社会の子どもたち ㊸ バンコクーその4 教室の風景	深谷昌志 73
資料1 調査票見本および集計表	78
資料2 調査票見本(学年別)	80
資料3 学年別集計表	84

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	調査レポート	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	校外学習	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	要約			<input type="checkbox"/>

放送大学客員教授 深谷昌志
 千葉市教育センター 上杉賢士
 船橋市立大穴北小学校教諭 新井 誠
 千葉市立都賀小学校教諭 広森 滋

1. 5年生から本格的に実施される

校外学習を実施するのは5年生からで、全体の9割を超える。それ以下の学年で実施しているのは極めて低率であった。(表1)



2. 5年生では「林間学校」、6年生では「修学旅行」が平均的なパターンである

校外学習の名称は様々であるが、内容を検討すると、5年生では自然とのふれあいを重視し、6年生では社会的な見聞を広めることに重点をおいたプログラム編成がされていた。(表4、表7、図8、図9、図15、図16)



3. 教師側の評価は「まあまあ」である

子どもたちの活動に対する評価を教師にたずねた結果、それなりに満足してはいるものの、決して「期待以上」ではない。

(図11、図18)



4. 今後に期待することは、「子どもたちの自主的活動の充実」である

5年生では、社会的な見聞を広めることに、6年生では自然とのふれあいを深めることに、教師の期待が向いている。しかし、両学年に共通していることは、自主的な活動を充実させる点である。(表6、表9)

5. 関東地方や近畿地方の学校では、多額の費用をかけ、県外に場所を求めている

地方別のデータを比較したところ、行き先の選定や利用する施設にかなりの差が認められた。とりわけ、県外にしか場所を求めにくい関東や近畿の学校では、多額の出費も止むを得ないという事情がある。

(図21、図23、図24)



6. 学校規模による実施状況にかなりの差があった

大規模校では、行き先の選定などを中心にして、実施計画が比較的固定化されている傾向があった。地域や子どもの実態に応じたきめ細かく柔軟なプログラムを用意するためには、学校のサイズが大きな要因となろう。

(図27～図36)



7. 地域ごとに見たプログラムの内容にはあまり差がない

いずれの地域においても、5年生では「キャンプファイヤー」、6年生では「史跡めぐり」がプログラムの中心になっている。子どもたちを取り巻く環境に応じて個性的なプログラムの開発が望まれる。(図37、図38)

●調査概要

1. 調査主題 校外学習
2. 調査視点 宿泊をともなう校外学習に対する学校側の対応をたずね、現状における

問題点の整理と改善の方向を探る。

3. 調査項目 校外学習に対する学校側の対応、諸条件、今後の方向や力点事項、校外学習の評価、など。
4. 調査時期 1989年11月

8. まとめ

個性的なプログラムの開発に加えて、校外学習のカリキュラム化が望まれよう。林間学校から修学旅行へという展開には、必ずしも確かな教育的意図を感じにくい。低学年のうちから、少しずつ課題の難度をあげ、次第に自主的な活動や運営へと発展させる意図的な計画作成が必要となろう。



5. 調査対象 教務主任と校外学習を実施した学年の先生

6. 調査方法 小学校へ質問紙を郵送

7. サンプル 全国2,500の小学校をランダムに選び、調査票を送付

有効サンプル 1,006通

回収率 40%



はじめに

平成元年に公示された新学習指導要領の特別活動編に、「遠足・集団宿泊的行事」という表現が登場した。

旧指導要領の「遠足・旅行的行事」が変更された結果である。その背景には、こうした学校行事がやや形骸化し、社会の実情にそぐわなくなってきたという反省がある。

本シリーズでも、すでに vol. 5-3 で、「修学旅行」をテーマに取り上げ、全国調査を実施してきた。その結果、修学旅行の内容が画一化され、学校ごとの個性が乏しいという現状が指摘されている。

その一方で、マスコミュニケーションやモチベーションが高度に発達した現代において、「見知らぬ土地へ行き、実物を見る」といったかつての修学旅行がもっていた意義はかなり薄れてきている。そうした点を考慮すれば、学校行事の特性から考えて、集団生活を体験させることに重点をおいたプログラムの開発がもっとなされてもよい気がする。

そこで、修学旅行も含みながら「宿泊をともなう校外学習」の全体にテーマを拡大し、あらためてその現状における問題点の整理と改善の方向を探ることにした。調査にご協力いただいたのは、全国で約1,000校であった。

本レポートは、その結果を集約したものである。

なお、調査の実施に際しては、巻末に示したように、学年ごとに調査用紙を変え、計画や内容をより具体的に把握できるように配慮した。それに、この種の行事に対する学校としての対応をたずねる質問紙（回答者は原則として教務主任の先生）を加えたものが、調査票全体の構成である。

1. 調査サンプル校のプロフィール



調査対象校の概要

調査結果の報告に入る前に、今回の調査にご協力いただいた学校の特性について整理しておきたい。

まず、全体質問(回答者は教務主任の先生)の用紙が送付されてきたのは、1,006校であった。学年ごとの用紙は、実施している場合のみ返送していただくことにしたので、この数字を下回る。特に、4年生以下の学年では回収率が極めて低かったため、その結果は全体的な傾向の分析の中にも含めることにした。

さて、調査対象校の概要は、図1に示した通りである。

全体として、所在地の特性が「大都市」「中小都市」「農・山・漁村」にほぼ3等分されている。また、学級数や児童数によって推測できる学校規模も、適度にバランスのとれたサンプル構成となっている。

この結果を地方別に示したのが、次の図2である。

地域ごとの特徴をより鮮明にとらえるために、行政上の区分とは別に、「北陸地方」を「中部地方」から分離させ、都合、8地方に整理した。なお、「四国」と「九州」を合わせたのは、サンプル数が少なかったためである。

図1 調査対象校の概要

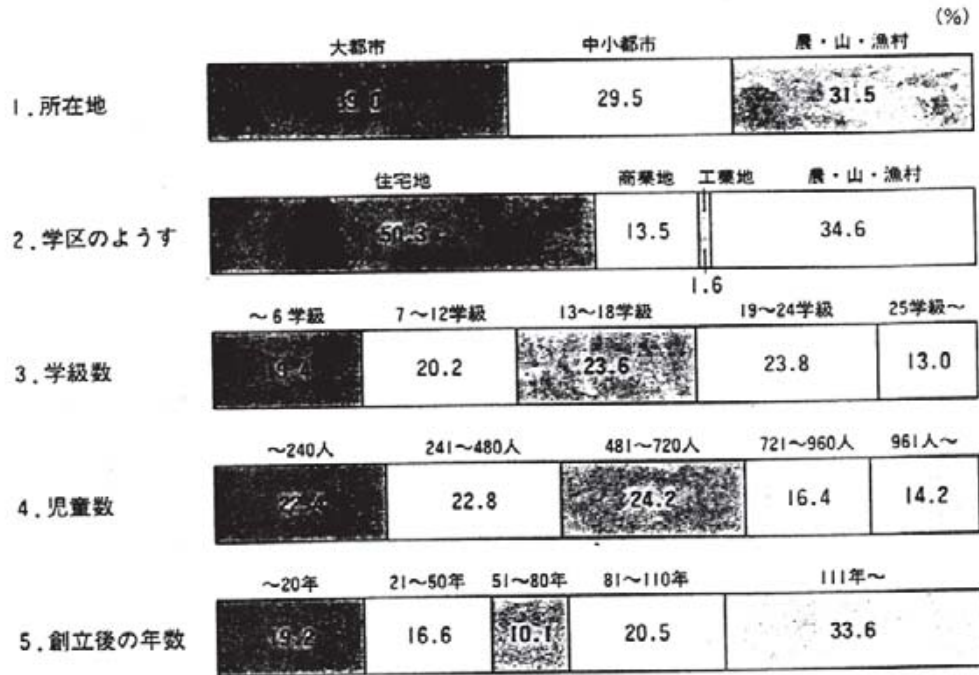
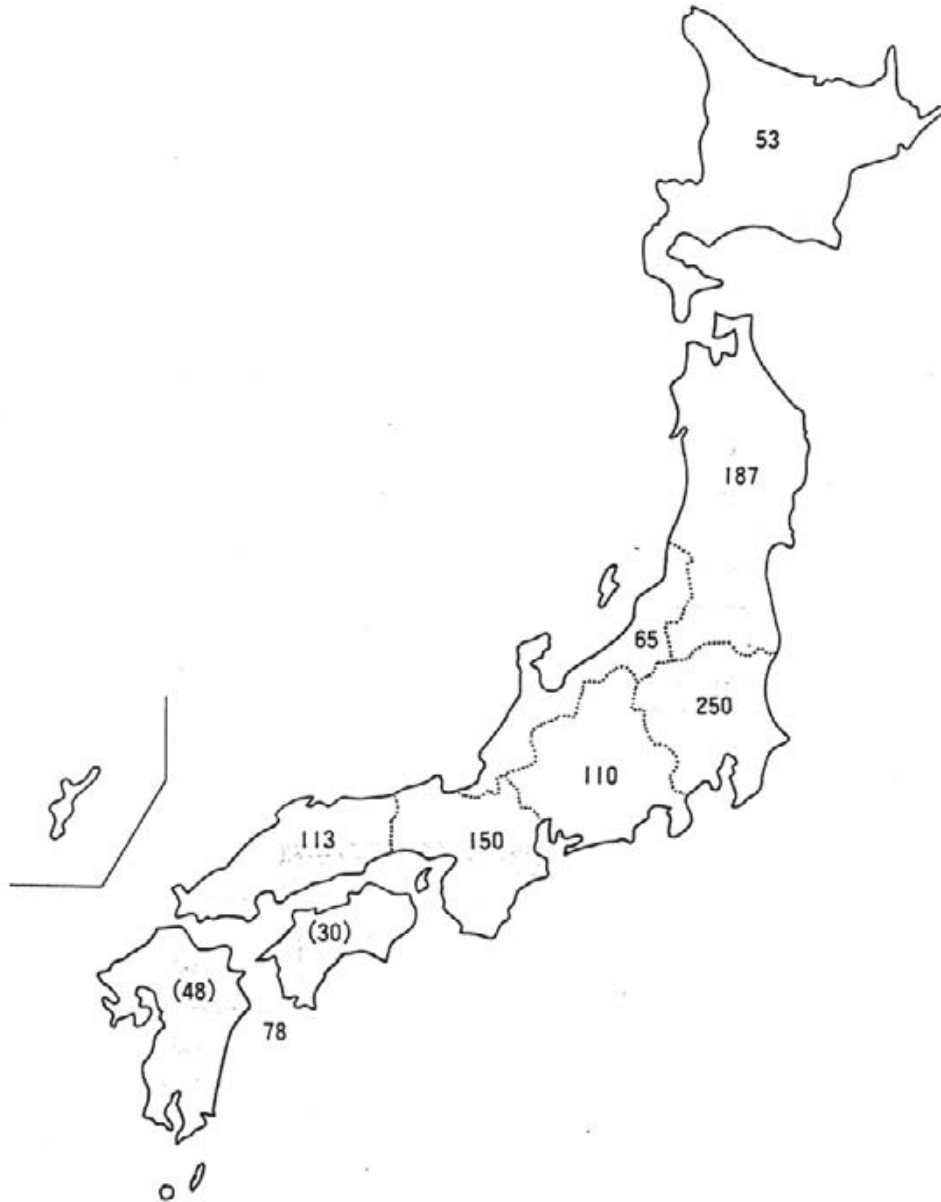


図2 地方別サンプル数



属性間の関連

さて、以下の報告は、いくつかのクロス集計の結果にもとづくことになるが、その際に問題になる属性の相互関連について、若干の

補足をしておきたい。

図3と図4は、それぞれ、学校規模と所在地の特性、学校規模と創立後の年数の関連を

図3 学校規模×所在地

(%)

	大都市	中小都市	農・山・漁村
小規模校	16.2	14.2	69.6
中規模校	48.5	30.6	20.9
大規模校	48.0	46.0	6.0

※学校規模は、児童数を基準にして、全体を3等分した

図4 学校規模×創立後の年数

(%)

	～20年	21～50年	51～80年	81～110年	111年～
小規模校	6.6	12.3	5.2	26.7	49.2
中規模校	23.8	16.8	12.4	13.0	34.0
大規模校	26.6	20.4	8.2	16.7	28.1

示したものである。

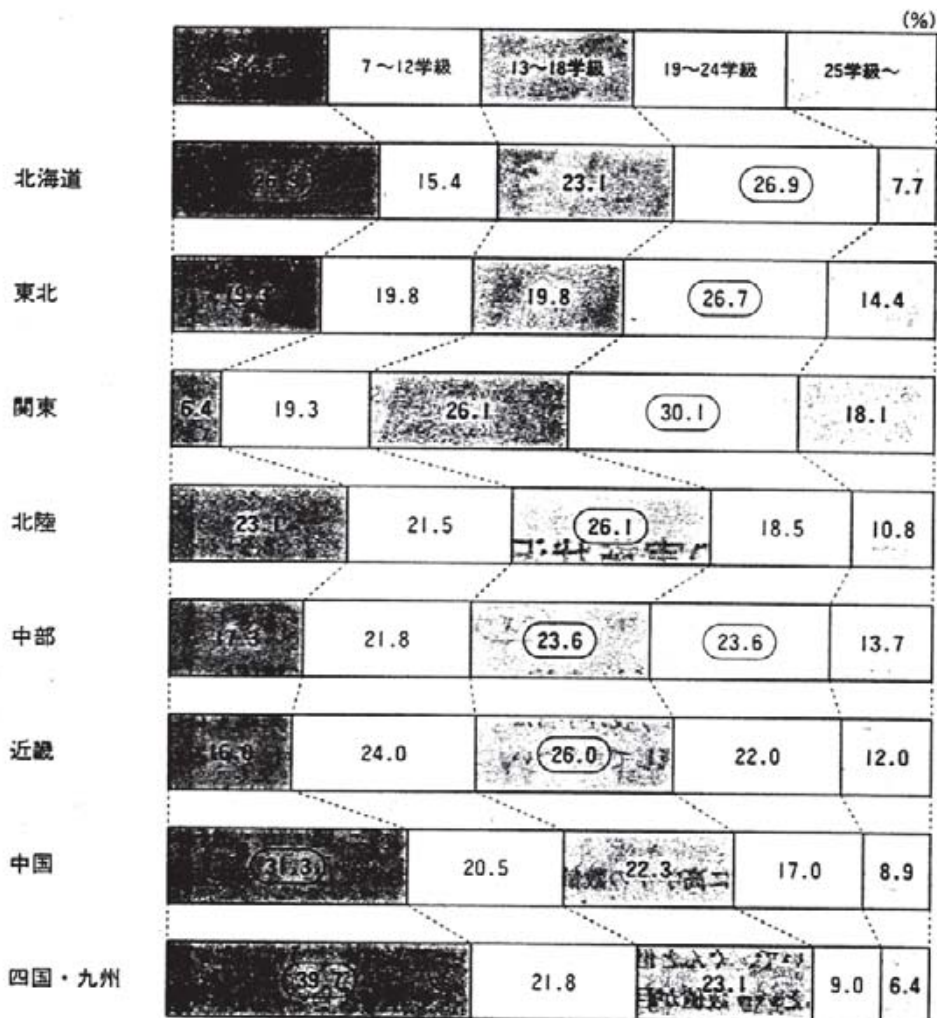
当然のことながら、大規模校は大都市に集中している。そして、大規模校は比較的新しい学校に多い。

さらに図5には、地方別に学校規模を整理した結果を掲げた。今回の調査対象校に限っ

ていえば、関東・中部・東北に大規模校が幾分多く、中国地方や四国・九州に小規模校が多い。

こうしたサンプル構成上の特徴を考慮した上で、以下のレポートの中では的確な分析を心がけたい。

図5 地方別学校規模



2. 学校としての対応



校外学習の実施状況

まず、教務主任の先生方にお答えいただいた内容をもとに、宿泊をともなう校外学習に対する学校としての対応を概観しておきたい。

表1は、学年別の実施率をまとめたものである。

全体としては、さすがに高学年の数値が目立っていて、9割を超える学校が校外学習を実施している。次いで、ぐんと低率ではあるが、4年生の18%という数値が目を引く。これらの学校では、おそらく4年生の活動を高学年に向けての準備段階として位置づけているのであろう。そして、それ以下の学年で校外学習を実施するのは、極めて稀なケースとなっている。

表の以下には、この結果を学校のもつ属性

別に整理して掲げた。それによると、5年生から本格的に実施するという傾向はいずれの学校にも共通しているが、それ以下の学年での実施率にいくつかの差が認められる。

まず、農・山・漁村にある学校や小規模校においては、4年生以下の実施率が他に比べて幾分高い。サンプル構成について述べる中でふれたように、この両者はおそらく同じ層を指している。自然環境に恵まれ、比較的小回りのきく学校では、かなり早い時期から、宿泊をともなう校外学習を計画的に実施しているようすが読み取れる。

学年を単位として校外学習を実施する際の困難点のひとつは、宿泊施設の確保である。だから、とりわけ大規模校においては、年に

表1 宿泊をともなう校外学習の学年別実施率

(%)

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
全体		2.4	2.6	4.3	17.5	92.3	95.1
所在地	大都市	0.5	0.5	1.9	12.5	91.0	95.9
	中小都市	1.0	1.4	2.0	19.0	83.1	92.9
	農・山・漁村	6.1	6.8	10.4	19.7	86.4	92.2
学校規模	大	0.3	0.3	0.6	14.7	90.7	93.3
	中	0.5	0.5	1.6	11.0	85.0	92.9
	小	6.7	7.6	11.8	25.8	86.0	95.2
創立後の年数	新	2.1	2.1	3.3	16.0	83.7	95.5
	中	1.9	2.3	4.7	14.0	89.8	95.8
	旧	2.5	3.0	5.1	18.2	88.7	91.5
地方別	0.北海道	5.8	5.8	7.7	11.5	82.7	98.1
	1.東北	2.2	2.7	3.8	11.8	94.1	87.1
	3.関東	1.2	1.2	3.2	14.6	76.1	96.0
	2.北陸	3.1	3.1	6.2	20.0	81.5	89.5
	5.中部	1.8	2.8	2.8	11.0	96.3	91.7
	0.近畿	2.7	2.7	4.0	14.8	92.6	98.7
	2.中国	2.7	2.7	6.2	34.8	93.8	94.7
	四国・九州	2.6	3.8	5.1	14.1	82.1	88.5

何度も実施するわけにはいかないという実情があるであろう。

しかし、できるだけ早い時期から比較的簡単なプログラムを実施し、徐々に高度な課題

を与えるという、一種のカリキュラム化が理想的である。その点では、宿泊施設の確保にもそれほど苦勞しない小規模校が有利であるといえるのかもしれない。

表2 校外学習への積極性

(%)

		年々積極的に なっている	以前から 積極的である	以前から力を 入れていない	積極的では なくなってきた
全 体		9.1	84.8	3.8	2.3
所在地	大都市	7.3	87.9	3.2	1.6
	中小都市	8.5	86.0	3.1	2.4
	農・山・漁村	11.4	79.8	5.9	2.9
学校規模	大	6.1	89.7	2.6	1.6
	中	8.8	85.7	3.4	2.1
	小	12.5	77.6	6.4	3.5
地方別 （単位は、おそれある）	北海道	9.8	74.5	13.7	2.0
	東北	8.0	88.2	2.7	1.1
	関東	4.4	89.2	2.8	3.6
	北陸	13.8	75.5	9.2	1.5
	中部	8.3	85.2	2.8	3.7
	近畿	10.7	84.0	3.3	2.0
	中国	10.7	83.0	4.5	1.8
	四国・九州	14.1	79.5	3.8	2.6

次の表2では、やはり農・山・漁村にある小規模校で、校外学習への取り組みが年々積極的になってきている傾向が示されている。そして、大都市にある大規模校では、「以前か

ら積極的である」への回答が目立っている。

それぞれの学校がかかえる事情については、もう少しデータを加え、章をあらためて考察することにした。

校外学習の実施に向けて

さて、校外学習の実施をめぐるのは、いくつも検討しなければならないことがある。

ここでは、それらの中から行き先の選定を中心にした基本的なことがらについて、学校としての対応を概観しておくことにする。

まず、表3から、行き先の選定をめぐる事情についてながめてみよう。

ここで用意した選択肢は、「その他」も含めて4つである。その中で「教育委員会指定の方面」への回答率が最も高かったのは、「関東地方の大都市」にある学校であった。おそらく、そこには大勢の子どもたちを受け入れることが可能な宿泊施設も用意されているのであろう。

現実的な問題として、学校規模が大きくなればなるほど、学校が独自で行き先の選定や宿泊施設の確保をすることが困難になる。そ

の意味では教育委員会をはじめとする行政的なバックアップも必要になってくる。

さて、行き先の選定も含めて、校外学習の実施に際して特に念を入れて検討することがらについてたずねた結果が、次の図8である。

それによると、やはり何よりもまず、子どもたちの安全や健康の確保が最優先課題になっている。次いで、プログラム、すなわち内容的な充実度をどう高めるかという点への配慮である。

目下のところ、それ以外の項目は、検討はするが特に重要視されているわけではない。

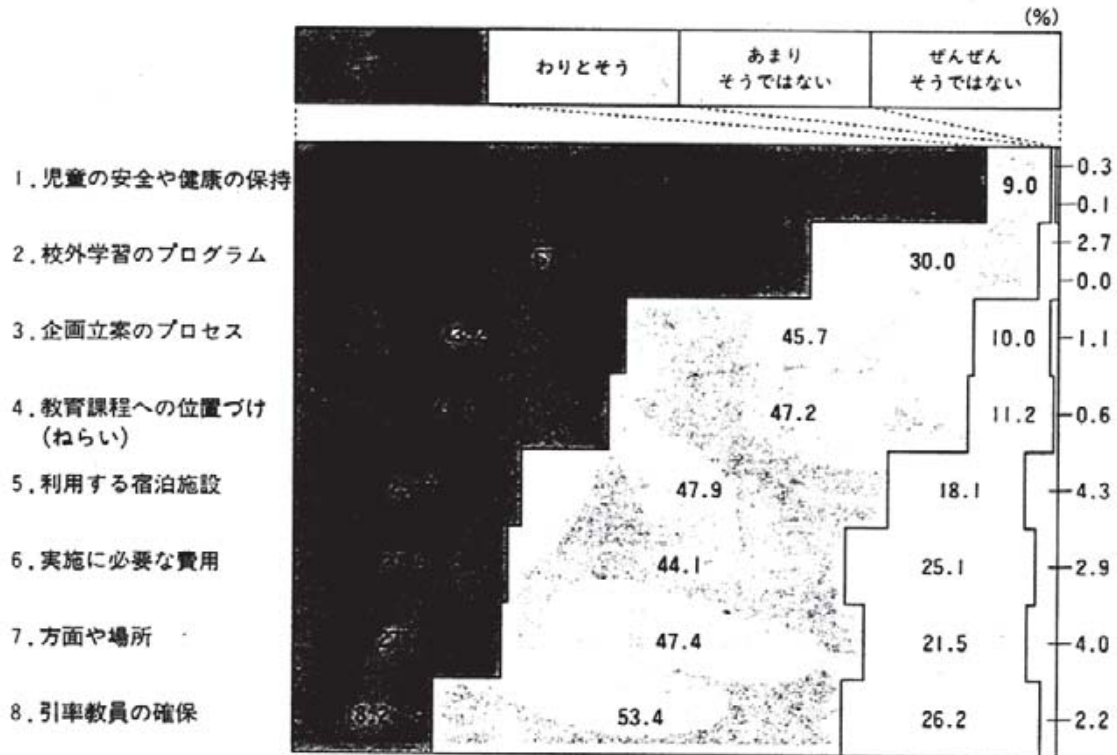
それでは、校外学習の具体的な内容がどうなっているか。以下の章では、いずれの学校においても実施率が高かった5年生と6年生の校外学習について、具体的な分析と考察を試みることにしたい。

表3 行き先の選定をめぐって

(%)

		学校で 決めてある	教育委員会 の指定	当該学年で 選定	その他
全 体		73.9	12.3	9.3	4.5
所在地	大都市	70.5	19.2	7.9	2.4
	中小都市	75.7	9.2	11.3	3.8
	農・山・漁村	73.1	7.9	11.5	7.5
学校規模	大	72.1	14.1	10.9	2.9
	中	73.1	14.1	9.7	3.1
	小	74.9	8.7	9.0	7.4
地方別	北海道	63.5	19.2	13.5	3.8
	東北	82.7	4.9	9.7	2.7
	関東	68.3	21.5	5.3	4.9
	北陸	67.1	6.3	21.9	4.7
	中部	78.9	11.0	6.4	3.7
	近畿	72.0	12.7	13.3	2.0
	中国	80.5	5.3	6.2	8.0
	四国・九州	65.4	15.4	12.8	6.4

図6 実施する際の検討事項



3. 5年生の校外学習



家を離れ、友だちと寝起きを共にした集団生活をする中で、子どもたちは様々な体験をする。そして、そこに含まれている教育的価値は多様で、かつ非常に大きなものがある。

このように考えると、校外学習が実際にど

のように行われているのか知りたくなってくる。多くの学校では、5・6年生で校外学習を実施しているので、まず、5年生の校外学習の実際から探っていくことにしよう。

🌀🌀🌀 諸条件 🌀🌀🌀

多くの子は、5年生で初めて校外学習に参加する。初めての校外学習の前夜は、見知らぬ世界への期待と1人で家を離れる不安とでなかなかおむれられないものである。そんな5年生の校外学習の基本的な諸条件について概観してみよう。

表4をご覧ください。これは、5年生の校外学習の名称をまとめたものである。一番多い「林間学校」という名称でも20%ほど

しかなく、各学校でいろいろな名称をつけて校外学習をしている。表をみると、「林間」「野外」「自然」……という文字が目につく。どうも野や山、海などで、自然に親しんだり、様々な体験活動をしたりすることをねらいとしていることがこの名称からうかがえる。

次に、図7に実施回数以下の諸条件についてまとめてみた。図から明らかなように、年に1回実施する学校が94%と、ほとんどである。

行き先は、県内が7割を超え、そのうちの2割強は、同一市町村内である。県外に出る3割弱の学校もその3分の2は隣接県である。行き先を今年になって決定したのは1割で、7割強の学校では以前から行く場所が決まっている。

期間は、大きく2通りあり、1泊2日(46%)か、2泊3日(47%)がほとんどである。

校外学習の場所までは、約8割の学校が貸し切りバスを利用している。一般の交通機関に比べると少々費用はかかるものの、子どもの把握が容易で、現地についてからの移動も自由になるということで利用が多いのであろう。

宿泊は、県の施設を利用する学校が35%と一番多く、以下、市町村施設33%、民間施設19%と続く。5年生の場合、民間施設の利用は少なく、多くの学校は公営の施設を利用している。

公営施設を利用するために費用は安く、38%が3,000円以下、31%が5,000円くらいで、

1万円を超える学校は約2割ほどである。

子どもたちにこづかいを持たせる学校は15%ほどで、ほとんどの学校ではこづかいを持たせていない。参考までに、こづかいを持たせる学校の額を紹介すると、平均1,865円である。

校外学習に参加するときの服装を決めているのは58%である。その多くは、トレーニングウェアで、全体の約3分の2ほどである。これは、活動的な内容が多いためと考えられる。

諸条件の最後に引率の状況を紹介しよう。引率は校長67%、教頭51%という数字から明らかのように、校長と教頭と一緒に引率することは少なく、どちらか一方が全体責任者として引率しているようである。健康面をあずかる養護教諭の参加は84%で、必ず参加するというわけではなさそうである。校長または教頭と養護教諭、担任で引率が不足の場合は、専科、教務主任よりも他学年の先生が参加する場合のほうが多い。

表4 校外学習の名称(5年)

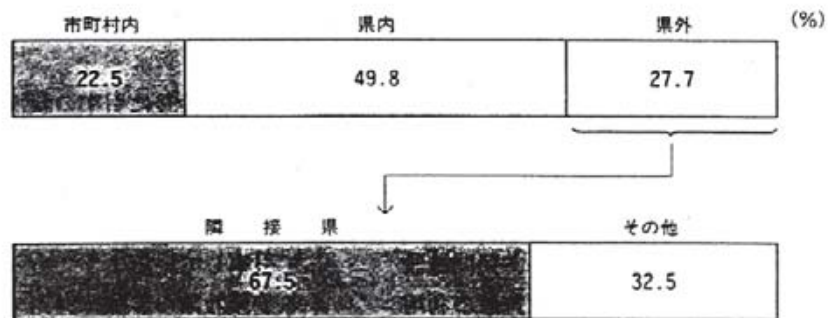
No.	名 称	%
1	林 間 学 校	19.5
2	野 外 教 室	11.2
3	自 然 教 室	7.5
4	臨 海 学 校	7.4
5	体 験 学 習	4.8

図7 校外学習の諸条件（5年）

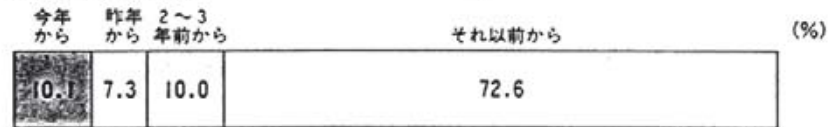
① 年間実施回数



② 行き先



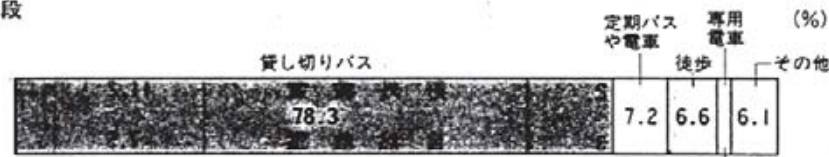
③ 今の行き先を決定した時期



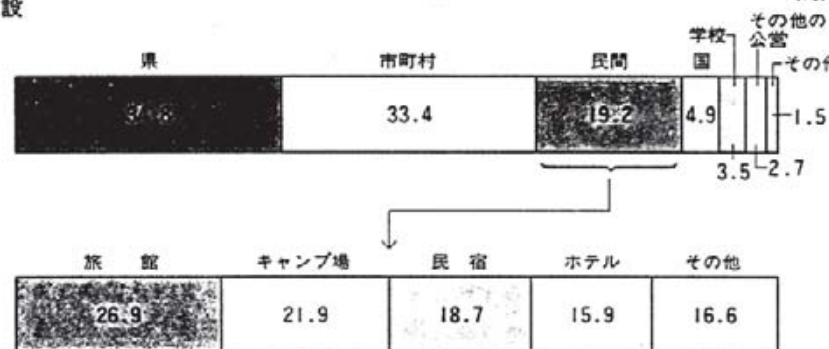
④ 期間



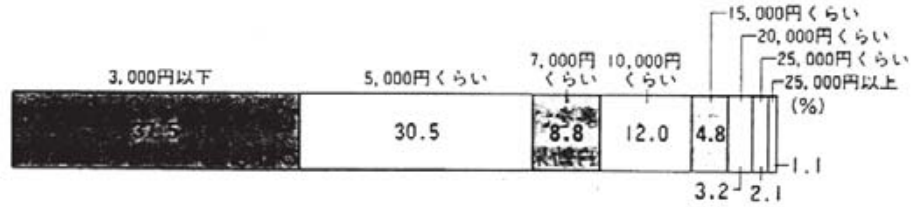
⑤ 移動手段



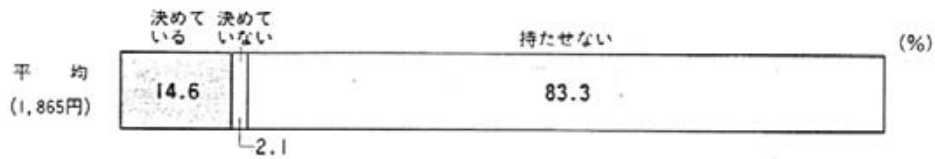
⑥ 宿泊施設



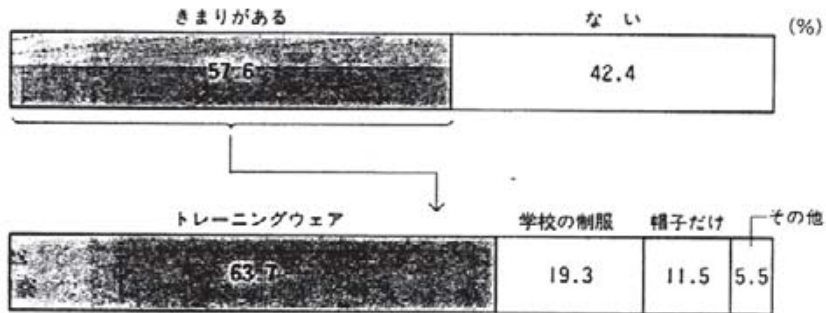
⑦ 費用



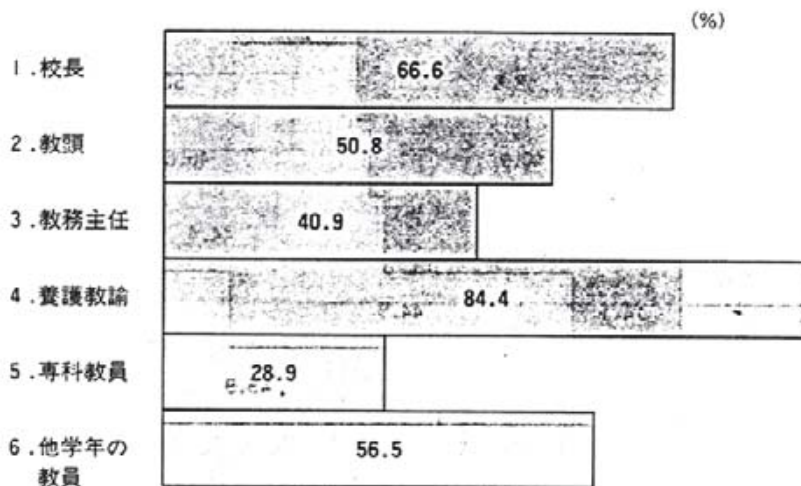
⑧ 子どものこづかい



⑨ 子どもの服装



⑩ 引率

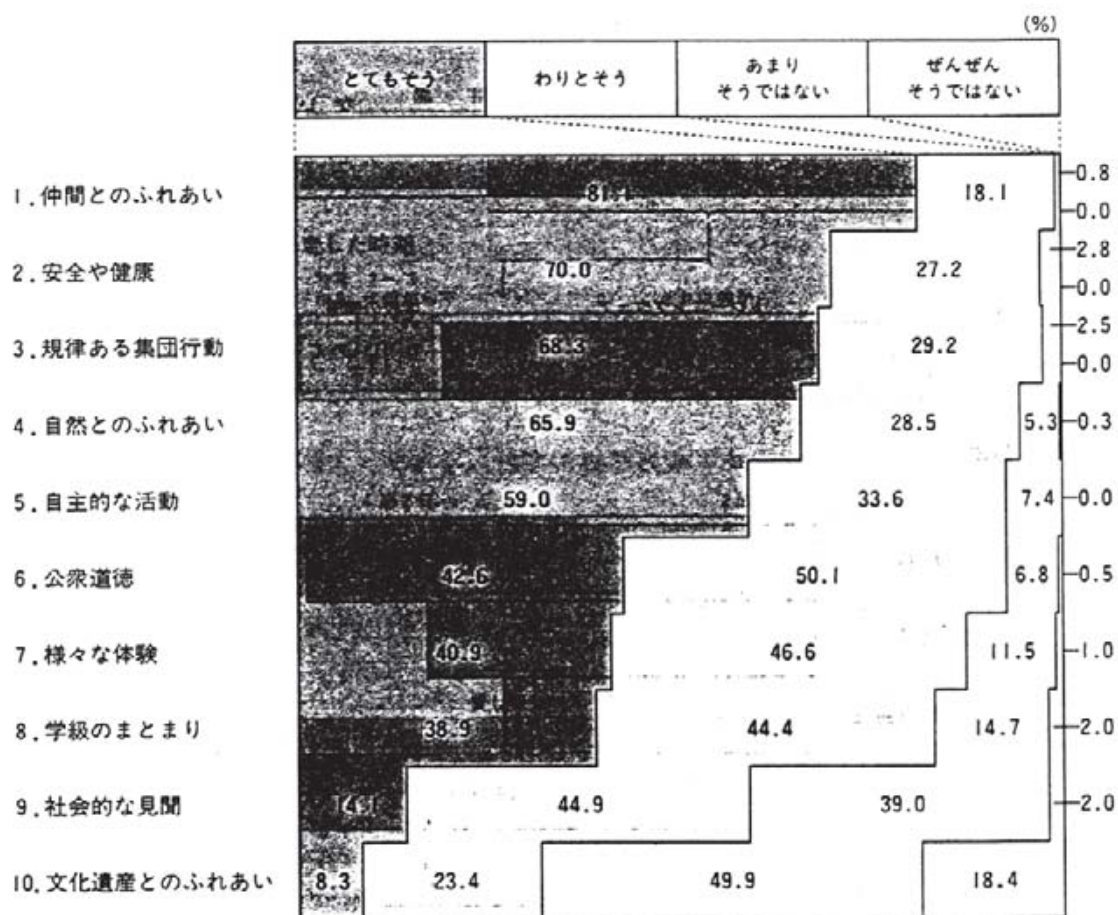


プログラム

校外学習という楽しい行事を、さらに楽しく意義深いものにし、教育的効果を高めようと、学校ではいろいろと努力と工夫が重ねら

れているようである。そこで図8では、校外学習の行き先の決定や企画立案に際して教師側が特に重点を置いた点についてたずねてみた。

図8 企画立案の重点（5年）

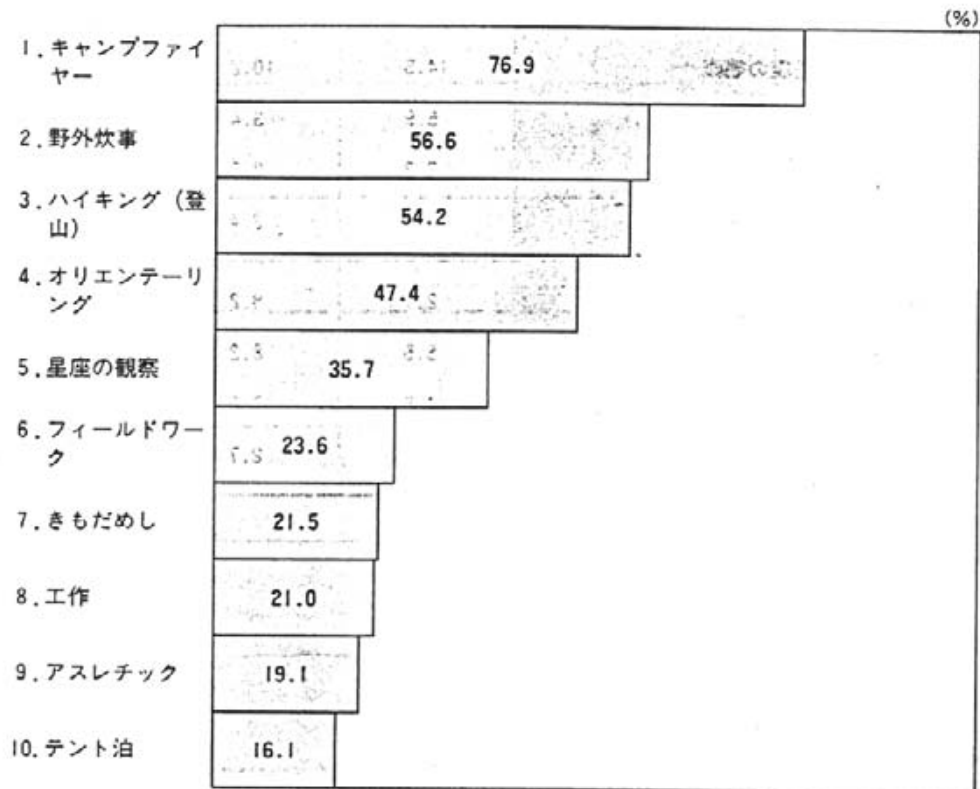


図が示すように、教師側が一番重点を置くのは「仲間とのふれあい」で、「とてもそう」という教師が81%。以下、「安全や健康」が70%、「規律ある集団行動」が68%、「自然とのふれあい」が66%と続く。「とてもそう」の数値が低い項目は、「文化遺産とのふれあい」(8%)と「社会的な見聞を広める」(14%)である。これは、5年生の校外学習では社会的・

文化的な体験よりも、自然との体験に重きを置いているためと考えられる。

そのことは、図9の今年のプログラムからも明らかである。図には、実際に行われたプログラムの上位10項目を掲げてある。一番人気のあるのは「キャンプファイヤー」(77%)で、その他、「野外炊事」「ハイキング(登山)」「オリエンテーリング」は、約半数ほどの学

図9 今年のプログラム(5年)



校で実施されている。

今後のプログラムの変化のようすを探ろうとしたのが、次の表5である。ここには、今年新たに実施されたものから今年中止されたものの数値を引いた値を示してある。今後増えていきそうなのが「星座の観察」、逆に他の

プログラムと変わりそうなのが、「キャンプファイヤー」だが、その数値は5%程度でしかない。結局は、今後も現在のプログラムとそれほど変わらない内容で校外学習が実施されていくのではないかと推測される。

表5 今後のプログラムの方向（5年）

(%)

	プログラム	新たに実施	今年中止	(実施－中止)
実施の方向	1. 星座の観察	14.5	10.2	4.3
	2. アスレチック	5.9	3.4	2.5
	3. 勤労体験	2.3	0.0	2.3
	4. 映画会	5.5	3.4	2.1
やめる方向	1. キャンプファイヤー	2.7	8.2	-5.5
	2. テント泊	5.5	8.2	-2.7
	3. オリエンテーリング	14.5	17.0	-2.5
	4. スキー	0.5	2.7	-2.2

👦👧👦👧 子どもの活動と評価 📊

校外学習は、教室内で授業を受けるのとは違った学習や教育の方法が行われることに特徴がある。学習の内容が教科の延長的なものであっても、教師主導のものでなく、子どもの主体性を重んじ、学校ではできない体験を積み重ねるところに意義がある。そのような配慮が十分なされると、子どもたちは、校外学習で教室の中では見せなかった能力を発揮し、

心身の調和のとれた成長のまたとない機会とすることができる。

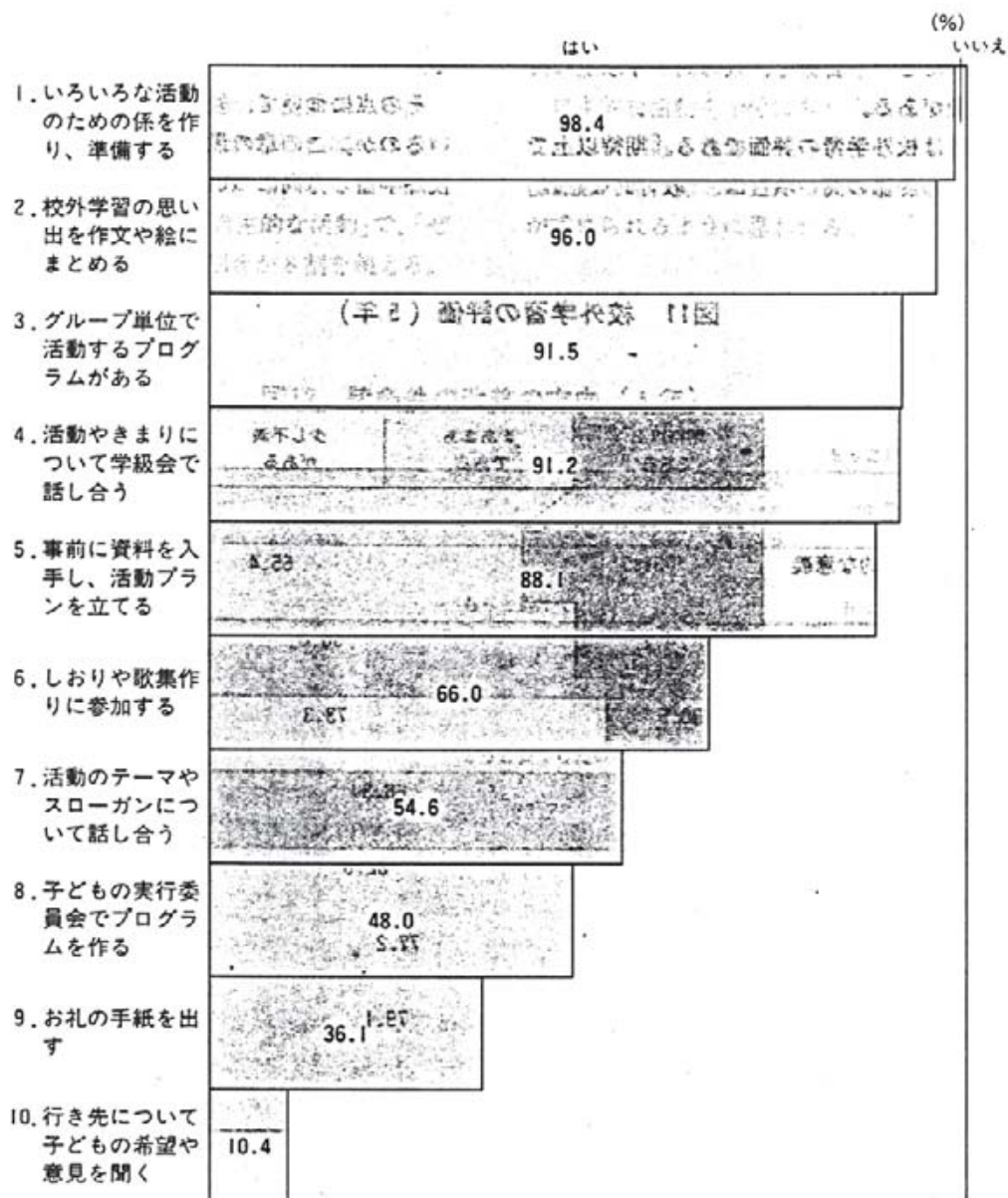
さて、子どもたちはプログラムの全体を通じて、どのような活動をしているのだろうか。子どもたちの活動のようすをまとめた図10を見てみよう。図を見ると、かなり子どもたちの活動の割合が高いことがわかる。トップの「いろいろな活動のための係を作り、準備す

る」から5番目の「事前に資料を入手し、活動プランを立てる」の5項目で9割前後という高い数値を示している。

しかし図をよく見ると、「行き先について子どもの希望や意見を聞く」(10%)、「子どもの実行委員会でプログラムを作る」(48%)とい

った項目が下位にきている。つまり、行き先やプログラムなどの企画立案は、ほとんど教師が行い、子どもたちは教師が決めた校外学習という枠の中で、係やきまりを決め、準備したり、現地で活動したりしているわけである。校外学習を実施するにはいろいろ制約や

図10 子どもたちの活動(5年)



業者との交渉などもあり、多忙な中、行き先やプログラムにまで、子どもの希望や意見を聞くことは大変なことだと思う。また、子どもの希望が多いからといって、それだけで行き先やプログラムを希望通りにできないことも多い。子どもの考えには無駄も失敗の危険も多いかもしれない。しかし、自分たちで考え、力を合わせ、やりとげたという喜びと自信を味わわせるためには、企画立案段階からもっともっと子どもたちの意見を聞き、子どもと一緒に新たな特色ある校外学習を作っていくのだという姿勢を、教師側が今以上に持つ必要がある。

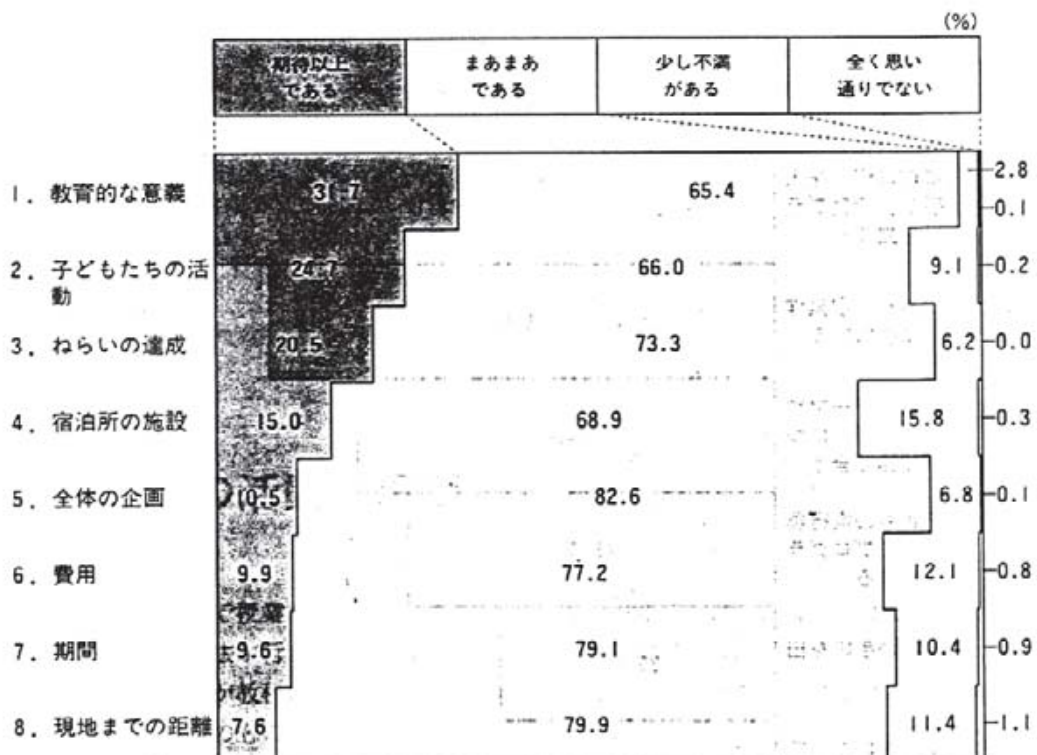
図11は校外学習の評価である。「期待以上である」と評価の高い項目は、「教育的な意義」

がトップで、次に「子どもたちの活動」である。しかしその割合は、2割～3割程度で、「期待以上である」という評価はそれほど高くない。図を見てまず気がつくのは、不満はないものの、特に素晴らしいというわけでもない「まあまあである」という評価がどの項目でも圧倒的に多いということである。

これは何を意味するのだろうか。どうも校外学習が毎年、行き先が同じ、プログラムもそれほど変わらないという状況の学校が多く、マンネリ化しつつあるためではないかと思える。

その点について、教師はどのように考えているのか。この章の最後に、今後の5年生の校外学習の方向について探してみたい。

図11 校外学習の評価（5年）



今後の方向

教師は、今後どのような点に力を入れ、望ましい校外学習にしていこうと思っているのだろうか。

図12は、図11で評価が下位にあった費用等の3項目についてたずねたものである。図が示すように、校外学習は「もっと長い」期間行い、「もっと近くで」、「もっと安く」することが望ましいという意見が8割前後ある。

企画立案段階で力を入れなければいけないと思っているのは、図13からわかるように、「仲間とのふれあい」「自主的な活動」で、「ぜひそっしたい」という割合が8割を超える。

表6で、企画立案の「今年の重点」と「今後の力点」を比較すると、これからの校外学習の方向が、一層明瞭になる。教師が5年生の校外学習として最も力を入れていこうと思っているのは「自主的な活動」で、次に「社会的な見聞を広める」と「文化遺産とのふれあい」である。

自主的な活動を十分に取り入れて学習するためには、あらためて校外学習そのものを、子どもの側の発想に立って見直していくことが求められるように思われる。

図12 諸条件の改善の方向（5年）

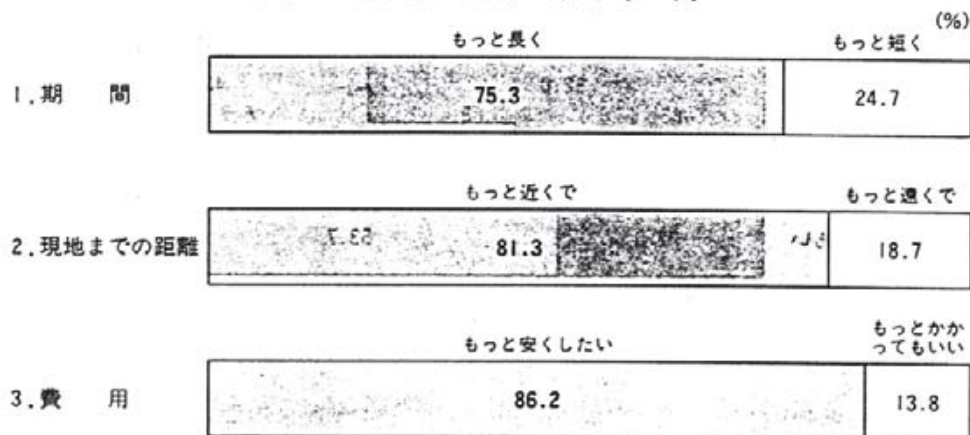


図13 今後の力点事項（5年）

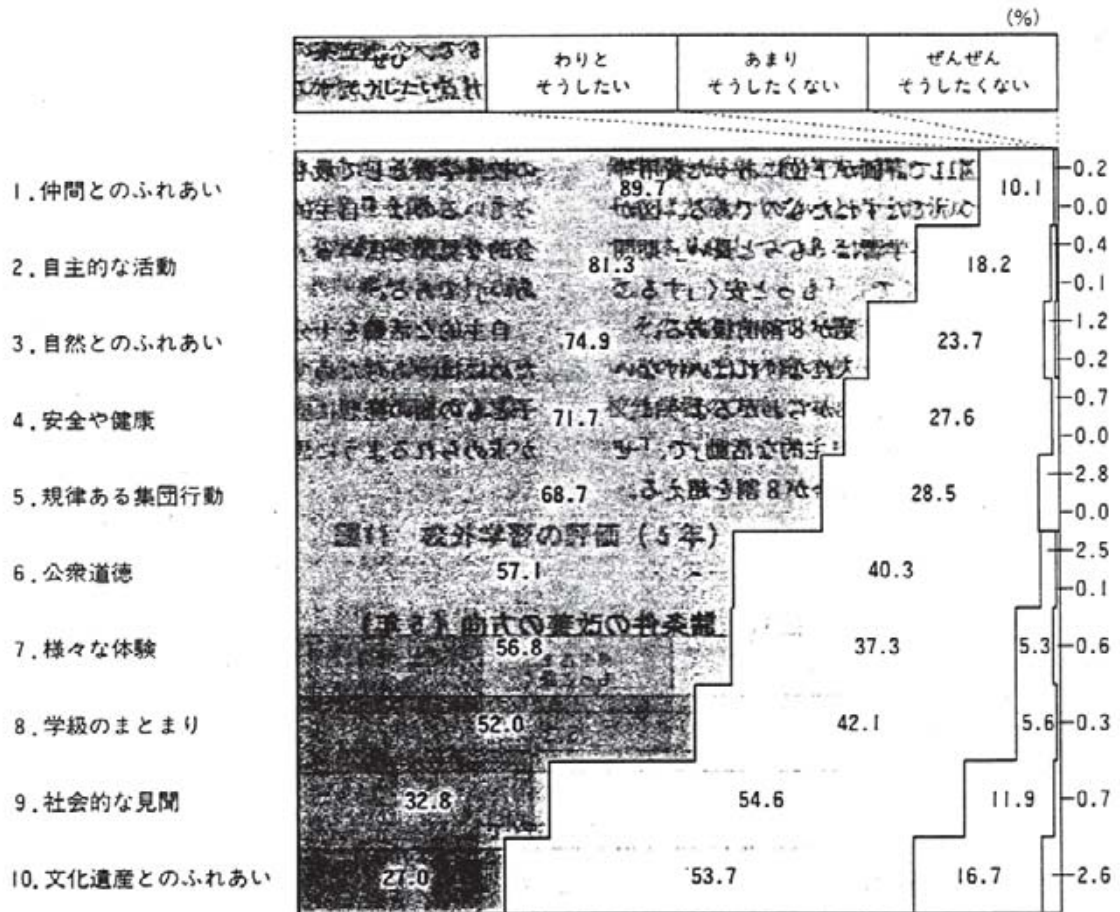
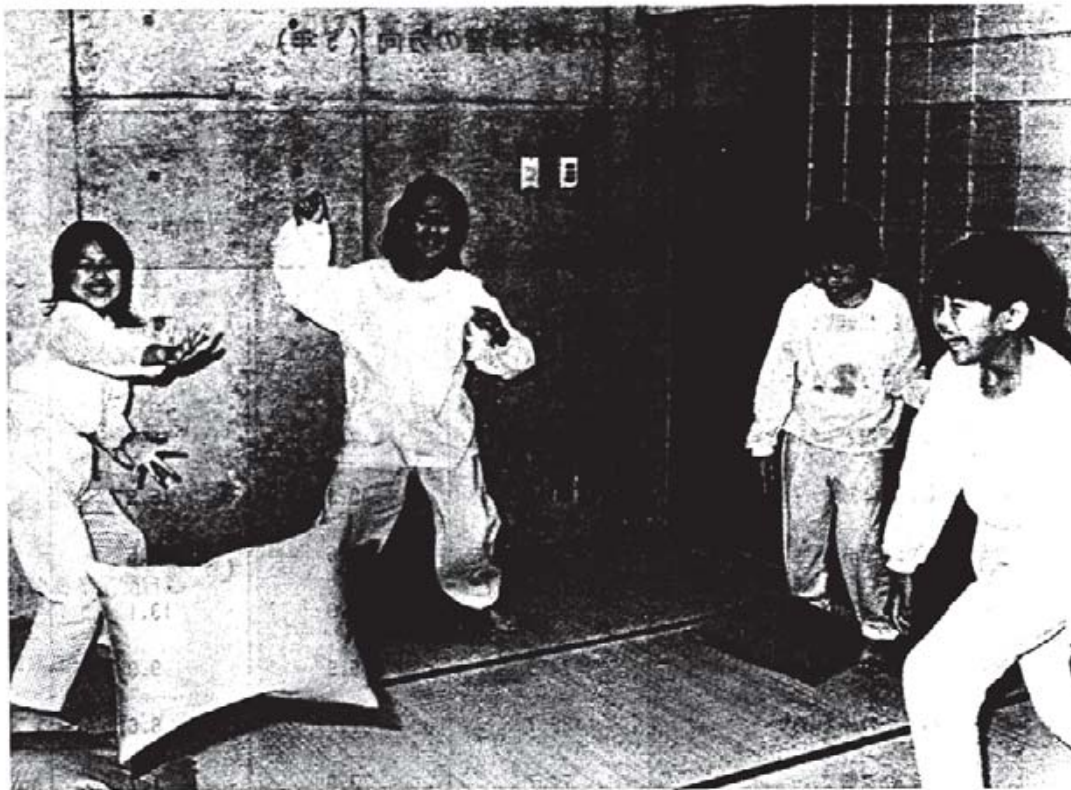


表6 これからの校外学習の方向（5年）

（％）

	今後の力点 (ぜひそうしたい)	企画立案の 重点 (とてもそう)	今後の方向 (力点一重点)
1. 自主的な活動	81.3	59.0	22.3
2. 社会的な見聞	32.8	14.1	18.7
3. 文化遺産とのふれあい	27.0	8.3	18.7
4. 様々な体験	56.8	40.9	15.9
5. 公衆道徳	57.1	42.6	14.5
6. 学級のまとまり	52.0	38.9	13.1
7. 自然とのふれあい	74.9	65.9	9.0
8. 仲間とのふれあい	89.7	81.1	8.6
9. 安全や健康	71.7	70.0	1.7
10. 規律ある集団行動	68.7	68.3	0.4

4. 6年生の校外学習



6年生の校外学習は、5年生のものとのような違いが見られるのだろうか。そんな素

朴な疑問を持って、5年生と同様に6年生の校外学習の実際を探っていくことにしよう。

👤👤👤 諸条件 👤👤👤

表7をまずご覧いただく。これは、6年生の校外学習の名称をまとめたものである。5年生の場合、名称はいろいろだったが、6年生の場合、「修学旅行」が76%と圧倒的に多い。

次に、図14に実施回数以下の諸条件についてまとめてみた。図から明らかなように、約8割が年に1回実施し、約2割が2回実施する。5年生に比べ、2回実施する学校が1割程度多い。

行き先は、県外が7割を超え、その3分の2は隣接以外の県である。6年生ということ

で、かなり遠くまで出かけているようである。行き先の決定は、5年生と同じように、以前から行く場所が決まっている学校が多く、約8割である。

期間は、1泊2日が74%で、5年生に比べ増えている。

移動の手段は5年生と同様、4分の3は貸し切りバスを利用している。

5年生では公的宿泊施設を利用する割合が多かったが、6年生では約7割が民間施設である。民間施設としては、約半数が旅館、3分の1がホテルを利用している。

民間施設を利用するため、5年生に比べるとかなり費用はかかり、1万円を超える学校は4分の3に達し、1万5,000円くらいというところが36%で最も多い。

修学旅行という名で文化遺産のある観光地を回るためか、4分の3の学校ではこづかいを持たせている。平均こづかい額は3,196円で、小学生としてはかなりの額である。おみやげを買うことに熱中する子どもたちの姿が目に見えかぶ。

服装のきまりについては、44%の学校できまりがあるという。5年生のようにトレーニングウェアという学校は27%で、44%は学校の制服を着るように指導している。

諸条件の最後に引率職員を紹介すると、6年生では、5年生に比べ校長の参加率が高いことが目につく。最高学年の校外学習ということで、校長の登場ということになるのだろう。

表7 校外学習の名称（6年）

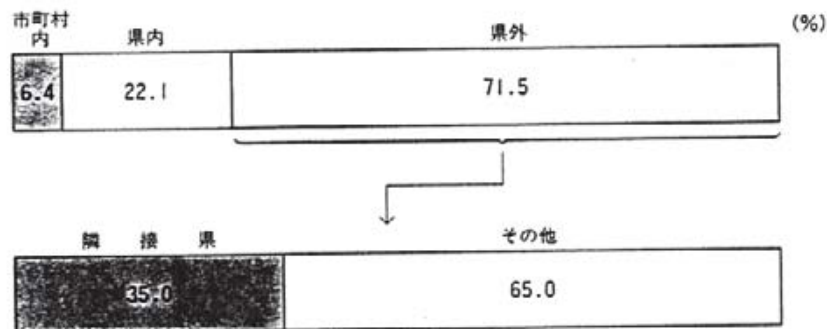
No.	名 称	%
1	修学旅行	75.7
2	林間学校	5.7
3	移動教室	3.3
4	臨海学校	3.3
5	自然教室	2.1

図14 校外学習の諸条件（6年）

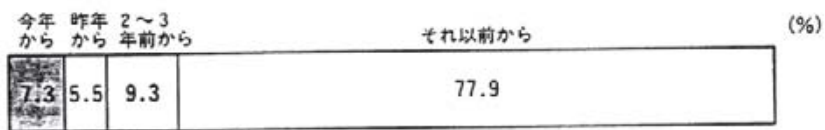
① 年間実施回数



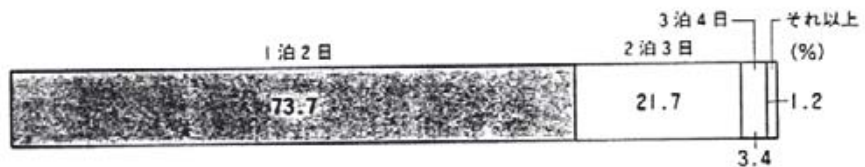
② 行き先



③ 今の行き先を決定した時期



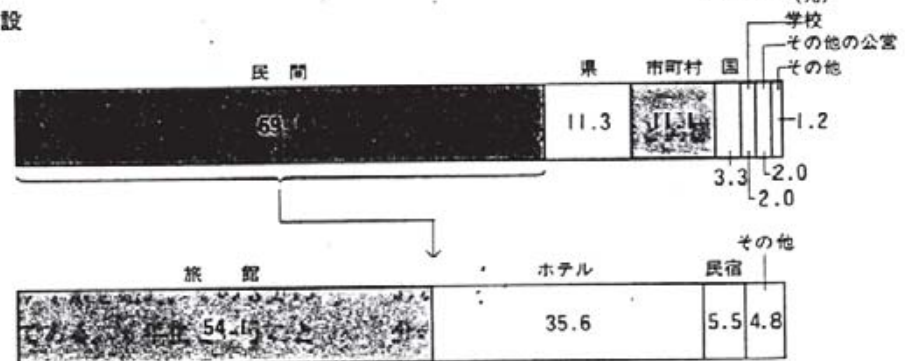
④ 期間



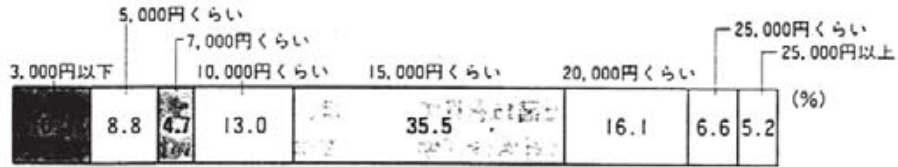
⑤ 移動手段



⑥ 宿泊施設



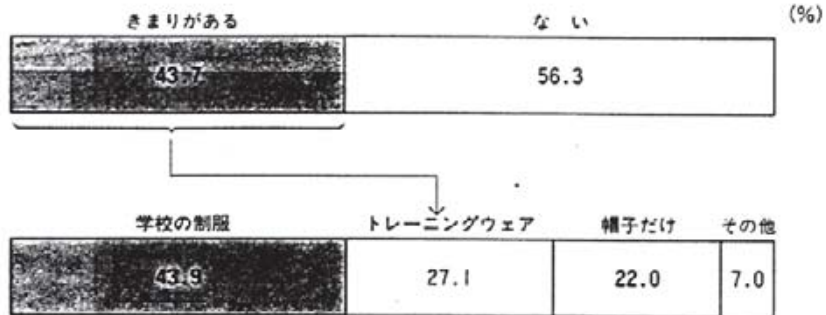
⑦ 費用



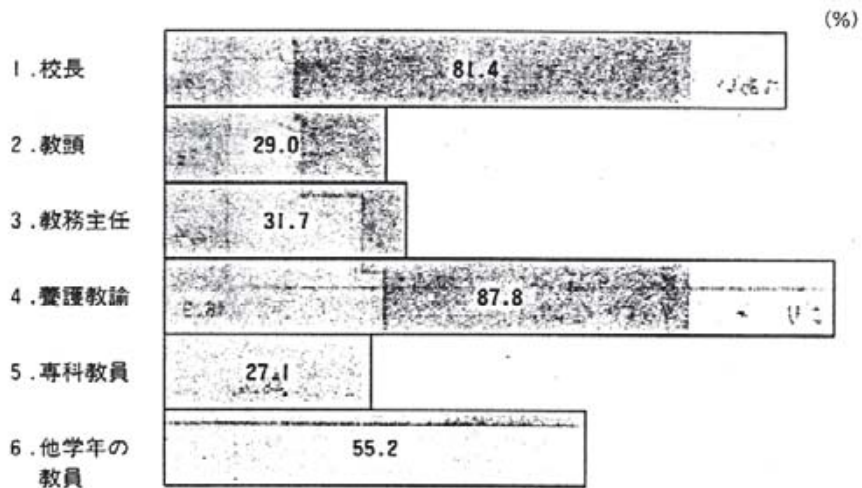
⑧ 子どものこづかい



⑨ 子どもの服装



⑩ 引率

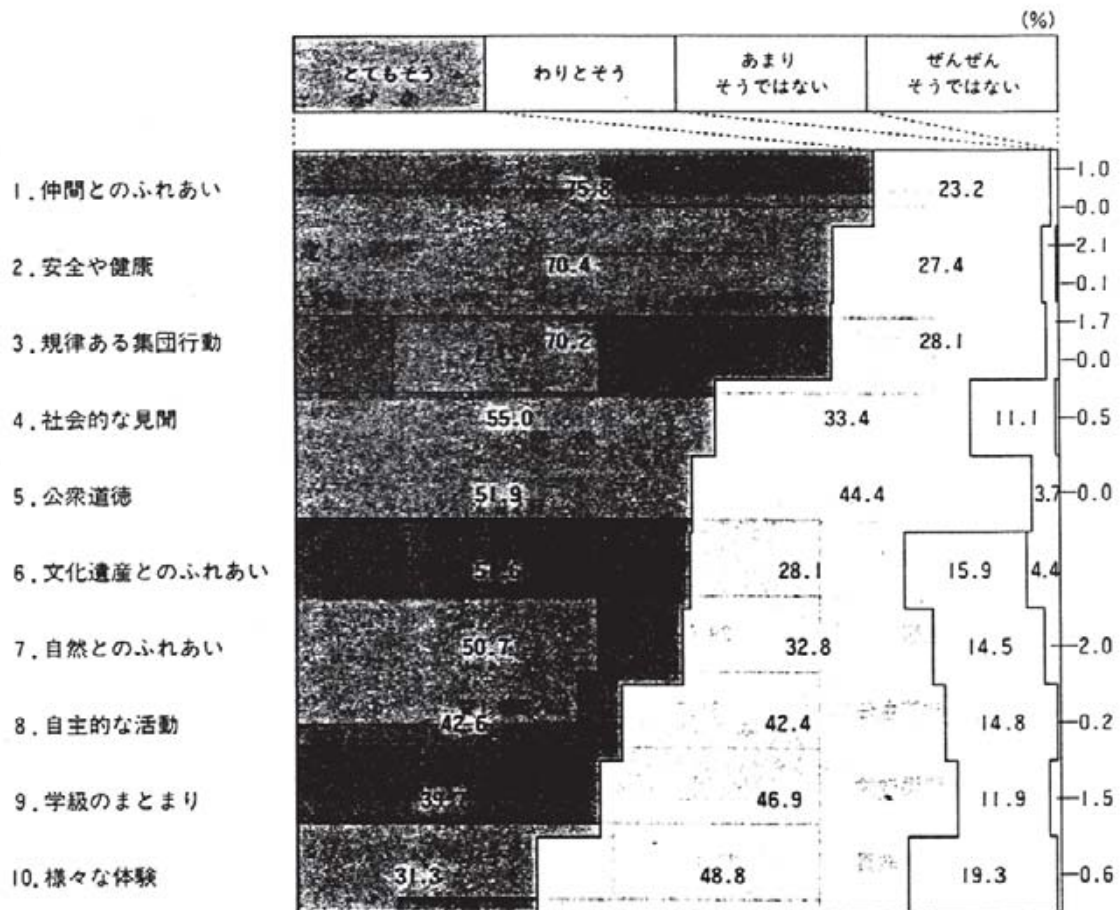


プログラム

まず、企画立案の重点を調べた図15を見てみよう。図を見ると、「仲間とのふれあい」「安全や健康」「規律ある集団行動」の上位3項目

は、5年生とピッタリ順位が一致している。5年生との違いは、5年生では「自然とのふれあい」「自主的な活動」に重きを置き、6年

図15 企画立案の重点（6年）



生では「社会的な見聞を広める」「文化遺産とのふれあい」に重きを置いているという点である。

プログラムを図16で紹介すると、上位に「史跡めぐり」(63%)、「博物館などの見学」(50%)が登場する。名称だけでなく、内容的にも例えば、5年生は「自然教室」、6年生は「修学旅行」というスタイルで位置づけられてい

るようである。

今後もこのようなプログラムの方向なのかどうか、さらに調査した結果が表8である。5年生同様、数値はそれほど高くないものの、今後、「フィールドワーク」や「オリエンテーリング」「制作体験」など、「自然とのふれあい」や「体験」を志向するきざしが感じられる。

図16 今年のプログラム(6年)

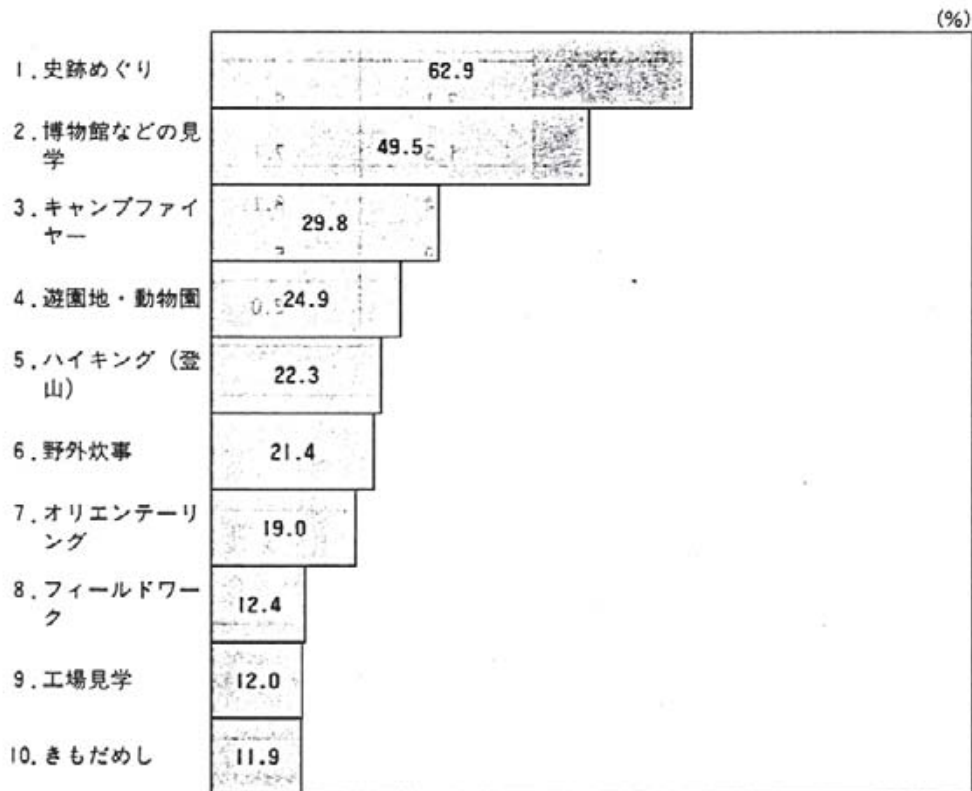


表8 今後のプログラムの方向（6年）

(%)

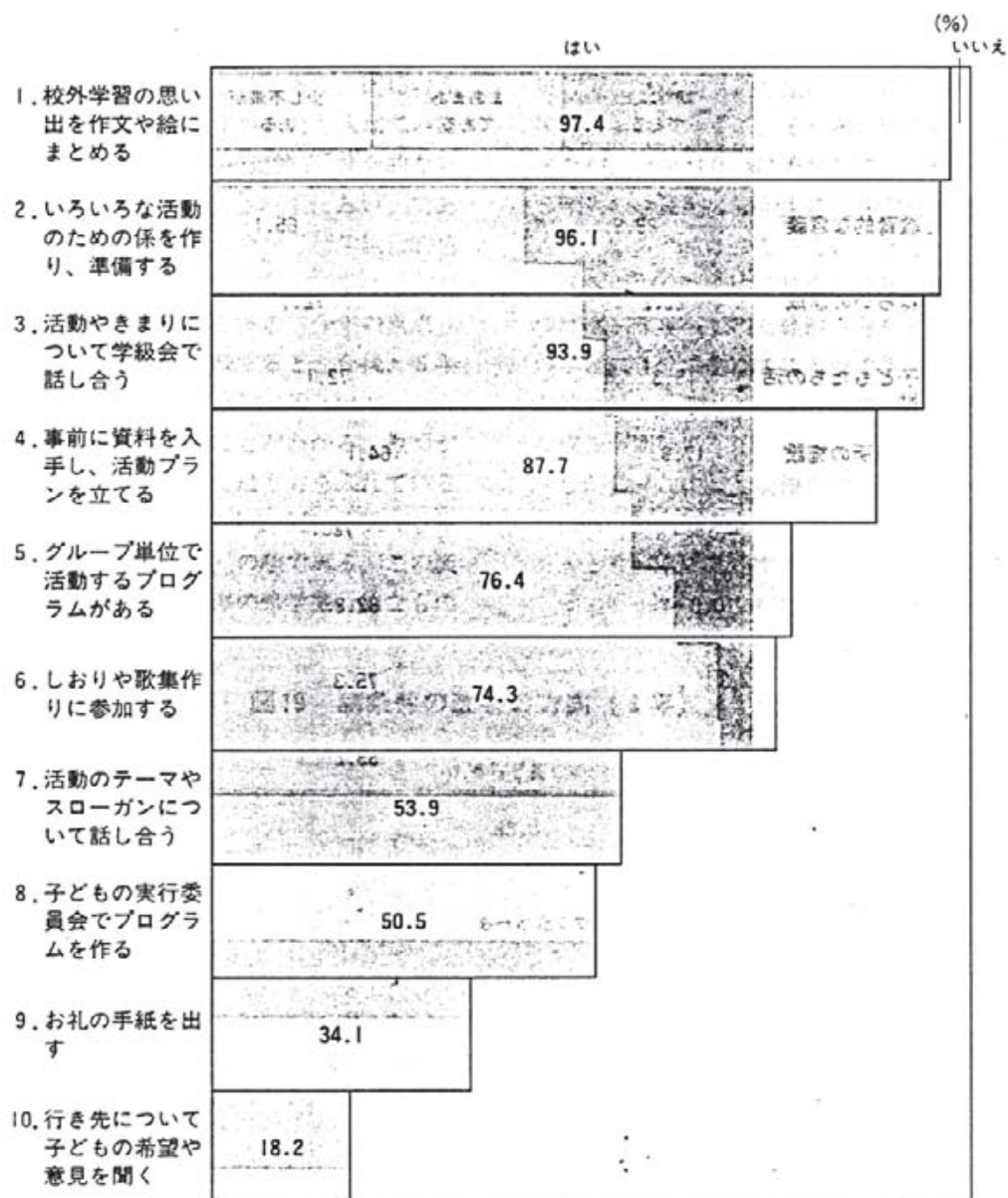
	プログラム	新たに実施	今年中止	(実施—中止)
実施の方向	1. フィールドワーク	8.1	1.0	7.1
	2. オリエンテーリング	11.9	6.1	5.8
	3. 制作体験	10.6	6.1	4.5
	4. プラネタリウム	6.3	2.0	4.3
	5. 勤労体験	4.4	1.0	3.4
やめる方向	1. アスレチック	3.1	9.1	-6.0
	2. テント泊	1.3	7.1	-5.8
	3. 工場見学	4.4	8.1	-3.7
	4. キャンプファイヤー	1.9	5.1	-3.2
	5. スケッチ	0.0	2.0	-2.0

子どもの活動と評価

5年生の子どもと比べ、6年生の子どもの活動状況はどのようなだろうか。さっそく図17を見てみよう。図17と図10を比べると、「グル

ープ単位で活動するプログラム」を除いては、ほとんど差がない。ただ5年生では、グループ単位の活動が92%あったのに対し、6年生

図17 子どもたちの活動（6年）

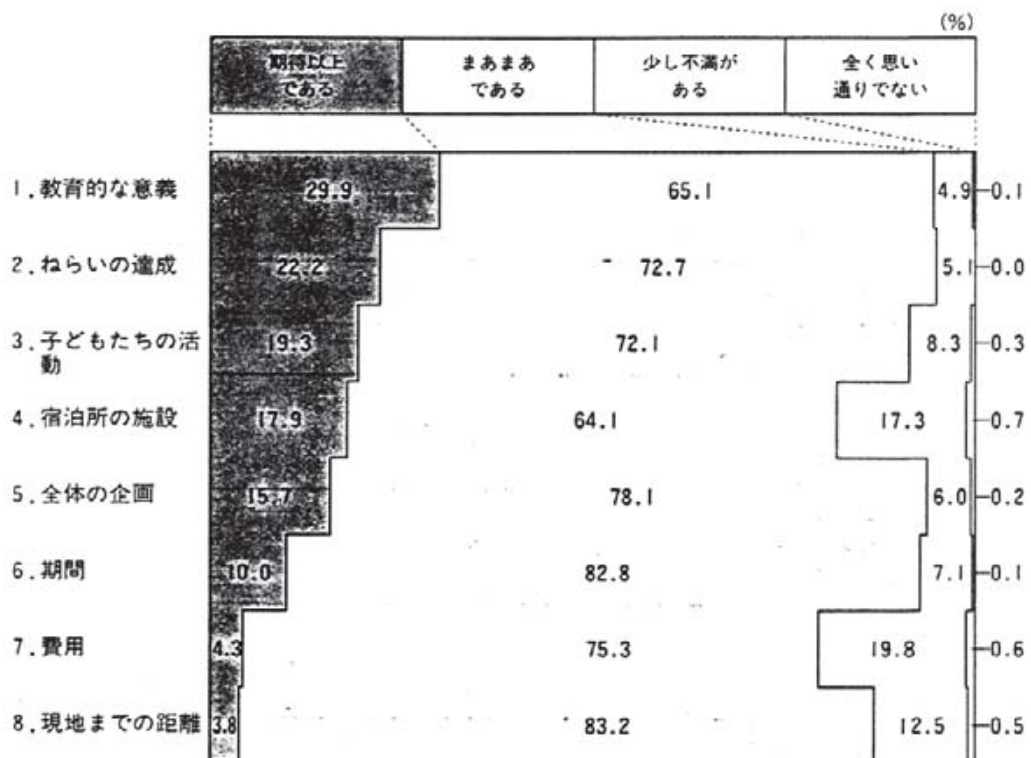


では76%と16%ほど低いのは気にかかる。本来5年生よりも6年生のほうが、子どもを中心とした活動がされるべきなのではないだろうか。

図18は、6年生の校外学習に対する教師の評価である。これも図11と比較するとよくわかるが、ほとんど同様の評価で、6年生でも「まあまあである」という回答が大部分であ

る。「子どもたちの活動」という点に目を向けると、教師も6年生よりも5年生のほうが「期待以上に活動した」という評価がわずかながら多い。修学旅行というと、子どもたちを中心に活動させるというよりは、みんな一緒に史跡などを見学し、ガイドの説明を聞いてくることが多くなってしまおうのだろう。

図18 校外学習の評価（6年）



今後の方向

6年生の校外学習を、今後どのようなものになりたいと思っているのだろうか。まず図19で、諸条件の改善の方向を探っていこう。5年生同様、期間は「もっと長く」、現地までの距離は「もっと近く」、費用は「もっと安く」という意見が大部分で、その割合は、5年生よりも高い。

次に、図20は企画立案段階での今後の力点事項についてまとめたものである。図13の5年生の場合と比べて6年生が力を入れていこうとしているのは、「公衆道徳」「社会的な見聞を広める」「文化遺産とのふれあい」である。5年生に比べると、今後も修学旅行的色彩は強いようである。

しかし表9で、企画立案の「今年の重点」と「今後の力点」を比較すると、今後、6年生の校外学習は現在の修学旅行とは違ったものになっていきそうなことがわかる。教師が6年生の校外学習として最も力を入れている割合が高いのは、「自主的な活動」「様々な体験」「自然とのふれあい」の順である。この表を見ると、教師主導の修学旅行的なもの

ではなく、子どもが中心になって活動し、様々な体験ができるものが予想できる。

5年生の表6でも「自主的な活動」がトップで、その他「社会的な見聞を広める」「文化遺産とのふれあい」という点に力を入れていく方向が示されていた。このようなデータを基に考察を進めると、自然や仲間とのふれあいや体験的な活動を主にしてきた5年生と、史跡等の見学的活動を主にしてきた6年生の校外学習はこれまで、それぞれ別個の活動だったが、今後お互いに不足している点を補い、5年生の延長上に6年生の校外学習が位置づくというスタイルになっていくと思われる。

5年生の延長上に6年生の校外学習が位置づけば、5年生で得た経験や力を6年生の校外学習に存分に生かすことができ、一層の教育的効果と子どもの心身の調和のとれた大きな成長が期待できる。

しかし、このような校外学習にしていくなめには、担当学年だけでなく、学校全体で、もっともっと議論をする必要があるだろう。

子どもが中心になって自主的な活動をさせ

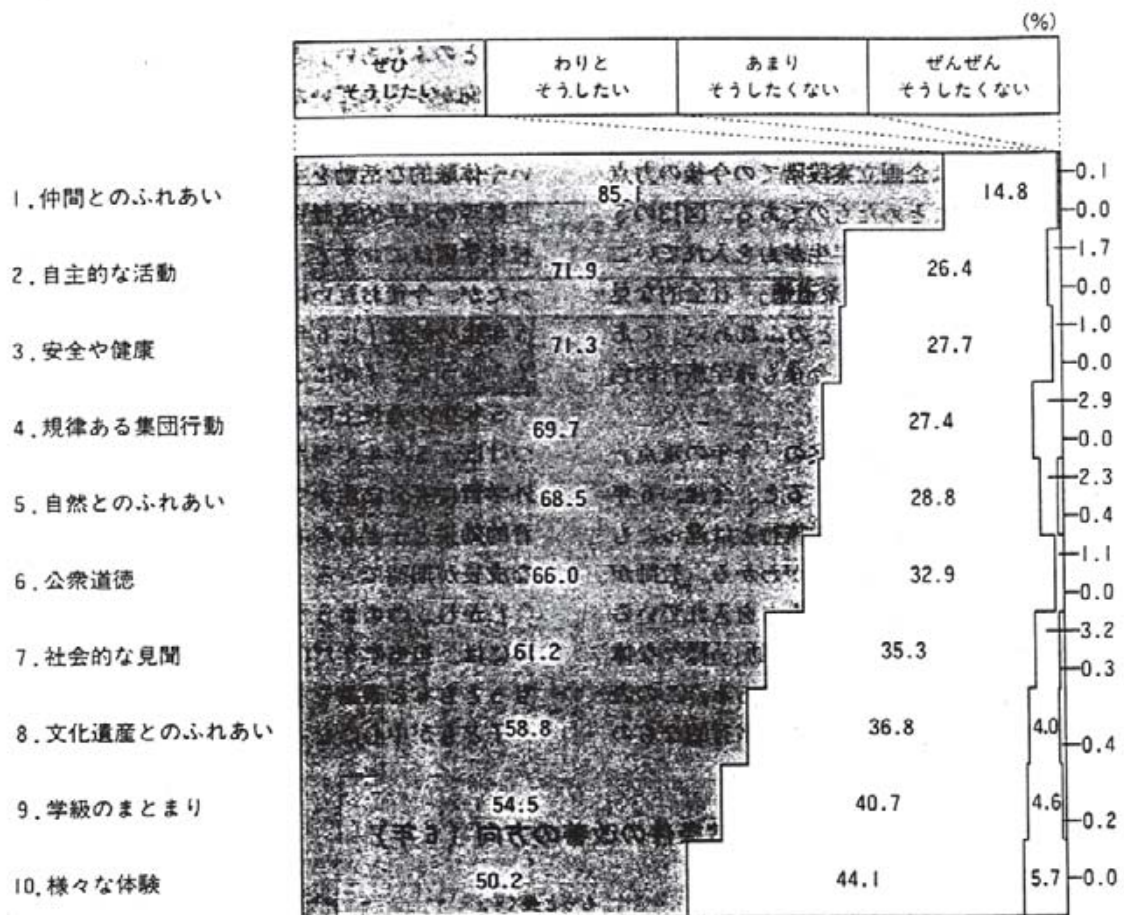
図19 諸条件の改善の方向（6年）

	もっと長く	もっと短く
1. 期間	85.0	15.0
	もっと近くで	もっと遠くで
2. 現地までの距離	89.3	10.7
	もっと安くしたい	もっとかかってもいい
3. 費用	94.0	6.0

るというが、そのためには、低学年からどんな力を育てていったらよいか。兄弟が少なく、仲間関係が希薄な今の子どもたちには、見知らぬ土地へ行って文化遺産を見る旅行と集団

生活や様々な体験を積む活動では、どちらが求められているのか。校外学習そのものをどうしたらよいかではなく、望ましい子どもを育てる学校教育の一環として校外学習をとら

図20 今後の力点事項（6年）



えて、話し合わなければならない。

現在の子どもの姿をとらえ、地域の状況を
生かそうという視点で校外学習への取り組み

を考えていけば、もっと学校の個性が表れた
校外学習を作っていくことができると思う。

表9 これからの校外学習の方向（6年）

(%)

	今後の力点 (ぜひそうしたい)	企画立案の 重点 (とてもそう)	今後の方向 (力点一重点)
1. 自主的な活動	71.9	42.6	29.3
2. 様々な体験	50.2	31.3	18.9
3. 自然とのふれあい	68.5	50.7	17.8
4. 学級のまとまり	54.5	39.7	14.8
5. 公衆道徳	66.0	51.9	14.1
6. 仲間とのふれあい	85.1	75.8	9.3
7. 文化遺産とのふれあい	58.8	51.6	7.2
8. 社会的な見聞	61.2	55.0	6.2
9. 安全や健康	71.3	70.4	0.9
10. 規律ある集団行動	69.7	70.2	-0.5